

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：34103

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780319

研究課題名(和文) 高年者の到達階層と社会的孤立に関する研究

研究課題名(英文) Strata of Destination and Social Isolation of Elder People

研究代表者

三田 泰雅(Mita, Yasumasa)

四日市大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：30582431

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、高齢者の到達階層と社会参加との関係を、集団参加、地域活動への参加、コミュニティ・モラル、ソーシャルサポートの観点から検討するため、三重県四日市市において質問紙を用いた郵送調査を行った。分析の結果、学歴は参加集団における活動程度や役割経験に関係があること、地域政治への参加意向に関係があることがわかった。さらに、地域への愛着に居住年数が影響すること、ソーシャルサポートの調達にはジェンダーの影響がみられることなどが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study examines the relationships between social class and the social participation degree of elder people from the next four viewpoints; their participation in local groups, local activities, community morale and social support. Survey data was obtained by mailing a self-administered questionnaire to local residents of Yokkaichi City, Mie Prefecture. Study results suggested that their educational background links to the willingness in participating in local groups and local politics. The number of years they lived in the community increased their community morale. Gender differences in the access to social support was also observed.

研究分野：社会学

キーワード：社会参加 高齢者

1. 研究開始当初の背景

高齢者の社会参加の程度を、現役時代の階層的地位と関係づける仮説がある(森岡1994)。到達階層が高い場合は退職後にネットワークを拡大させたいとする志向がみられ、逆の場合は規模を縮小させたいとする志向がみられるとする。しかしその後、この仮説に関する実証的な研究は行われてこなかった。

社会的ネットワーク研究、とくに都市社会学の分野で行なわれてきたパーソナルネットワーク研究では、制約の少ない人々には都市居住の効果としてネットワーク規模の拡大が見られるとする Fisher の下位文化理論や、Wellman のコミュニティ解放論の検証が行なわれ、個人の取り結ぶ関係を量的に捉えようとする努力が続けられてきた。

一方、おもに貧困研究の分野で、社会的ネットワークから切り離された状態ともいえる社会的孤立についての研究が行われてきた。その後、高齢者の社会的孤立に関する研究が社会老年学の分野を中心に行なわれ、階層的地位と孤立との関係に関する知見が積み重ねられてきた。

いってみれば「社会関係が豊かな人は生活上のさまざまな局面においても豊かである」ことを表現してきたのが社会的ネットワーク研究であり、逆に「経済的資源に恵まれない人は社会関係においても恵まれていない」ことを立証してきたのが貧困研究とそれにつながる社会的孤立研究であるということができよう。残念なことに、これまで両者はほとんど交わることがなかった。

やがて貧困研究を拡張した社会的排除論や、社会疫学における社会的ネットワークと健康に関する研究の登場によって、ネットワーク研究と貧困研究とがそれぞれ別個に積み上げてきた知見が出会う素地が整ってきた。

ただし、これまでの実証研究の多くはすでに排除されている人々や孤立している人々の特徴を描くことには成功しているが、社会的孤立の状態にある人々とそうでない人々との間の連続性はないもののように扱われてきた。社会関係は、豊かな状態から乏しい状態の両極の間にあり、社会的孤立はその乏しい極に寄った状態であるという立場にたてば、孤立のグレーゾーンともいふべき状況が無視されている点で、従来の視点には限界があると言わざるを得ない。本研究は、以上の問題意識のもとに開始された。

2. 研究の目的

本研究では、高年者の社会参加と社会的孤立を明らかにするという目的で、到達階層と社会参加、家族とサポート、家族・親族のサポートの3点の解明が目指された。

第一に、到達階層と社会参加との関係である。職業生活を退いた後のネットワークの再編や、地域集団への参加、地域活動への参加、

地域への愛着などに、現役時の職業的地位はどのように影響するのか。この点が課題であった。

第二は、家族とサポートの問題である。これまでサポート研究の多くは家族や親しい親族によるサポートを重点的に取り扱ってきた。このことは同居家族を無前提にサポート源とみなしてしまう傾向をもたらした。しかし同居家族がありながら孤立状態にある人々もあり、同居家族のサポートを所与とみなすことは難しくなっている。同居家族からのサポートが得られる/得られないのはどのような人か、を明らかにすることが課題であった。

第三は、家族・親族以外のネットワークによるサポートについてである。人々の生活に支援的な機能をもつのは、必ずしも家族や親しい親族のネットワークばかりとは限らない。近隣や友人など、近親以外のネットワークも視野にいれる必要が出てくる。近隣や友人ネットワークは、支援ネットワークとしての機能をどの程度果たしうるのか。果たすすれば、それはどのような形を通してか。この点を明らかにするため、近隣や友人を含むパーソナルネットワークのサポート機能を明らかにすることが課題であった。

3. 研究の方法

本研究では、大企業が集積し移動者の多い地方都市である三重県四日市市を調査地とし、同市に住む前期高齢者を対象とする郵送調査を行なった。

<調査概要>

【対象】三重県四日市市に住む 65~74 歳の男女

【調査方法】自記式の質問紙による郵送調査

【抽出方法】有権者名簿から系統抽出

【調査時期】2016年3月

【標本規模】2000

【有効回収】1164 (58.2%)

4. 研究成果

本研究は、地域における集団参加、地域活動への参加、地域への参加意欲、ソーシャルサポートの4側面から社会参加を検討した。それぞれの結果は次のようであった。

地域における集団参加

地域における集団参加では、団体の性質によって参加者の活動程度が異なること、学歴によって役員経験や活動程度が異なることが確認できた。

町内会や自治会、同窓会などには多くの人々が参加していた。ただし活発に活動している人はごく一部にとどまっていた。一方、趣味やスポーツの会に参加している人は全体の3割前後だったが、そのうち活発に活動している人は半数以上おり、団体の性質によって参加者の活動程度が違っていた。

また階層との関係では、町内会や自治会、趣味やスポーツの会のいずれも、学歴が高いほど役員をしている割合が高く、また積極的に参加している人の割合も高かった。

地域活動への参加

地域活動への参加では、複数の地域活動を示し、それぞれについて参加の程度をたずねた。選挙の投票をのぞくと、町内会・自治会を通しての活動に傾斜している様子が見られた。

活動のうちもっとも参加の割合が高かったのは国政選挙・地方選挙の投票活動についてであり、7割程度の人が「必ず行く」または「できるだけ行く」と答えていた。この2項目は、他の項目と大きな開きがある。

それ以外の項目では、参加の程度はだいたい低い。2項目以外で唯一、「参加」が過半数を超えたのは、公園や道路の掃除であった。続いて参加の比率が高かった防災訓練とあわせて、町内会や自治会の活動の一環として行われているような種類の活動は比較的参加している人が多かった。逆にリサイクルやバザー活動、防犯活動などは参加する人が少ない。このように、町内会・自治会と関わりがないか、関わりが薄い地域活動については、参加する割合が低くなっていた。

地域への参加意欲

コミュニティ・モラルに注目して地域への参加意欲をみると、治安・地域の人々のまとまり・定住意欲はおおむね高く、現在の居住地に対して肯定的なイメージをもつ人が多かった。一方、地域への情緒的コミットメントや地域の人々との一体感に対する評価など、共同体としての地域に対しては支持されない傾向にあった。居住年数が長いとコミュニティ・モラルも高くなっていた。また学歴が高いほど、地域を代表する市会議員の選出など、政治参加に対して肯定的に評価する傾向がみられた。

ソーシャルサポート

ソーシャルサポートの面から個人的な関係の広がりを見ると、困ったときの手助けなどの「手段的サポート」と、精神面での支えとなる「情緒的サポート」とで、調達の仕方が異なる傾向がみられた。

手段的サポートを頼める相手に関係別にたずねてみると、割合の高い順に「配偶者・別居の子・同居の家族・親せき・近所の人・友人・専門サービス」となった。手段的サポートに関しては、まずは夫婦・親子など近親が、続いてそのほかの親族が頼られる。

一方、情緒的サポートについて頼る相手に関係別にたずねたところ、やはり配偶者や別居の子をあげる割合が高かったものの、他の家族や親族よりも「近所の人」や「友人」をあげる割合が高かった。情緒的サポートでは、近親以外では、近隣や友人といった非親族を

頼る傾向がみられた。

手段的・情緒的サポートとも、中心になるのは近親という点で共通する。ただし、その外側に広がるサポート源は異なっていた。手段的サポートは親族に、情緒的サポートは非親族からと、使い分けが行なわれている。

また男女別に比較すると、男性がサポート源の多くを配偶者一人に依存していたのに対し、女性は複数のサポート源に分散してサポートを調達しており、配偶者への依存は高くなかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

三田泰雅、高年者の余暇活動と社会参加、四日市大学総合政策学部論集、査読無、15巻1号、2015、29-38

〔学会発表〕(計 2件)

三田泰雅・和秀俊・西村昌紀・遠藤伸太郎、(2013) 高年男性の娯楽と社会参加、日本老年社会科学大会第55回大会(大阪国際会議場)

三田泰雅、(2016) ICTの普及は親と成人子の関係に何をもたらしたか、日本老年社会科学大会第58回大会(松山大学)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

三田泰雅 (MITA, Yasumasa)

四日市大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：30582431

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()